

# 京都産業大学新聞

発行

京都産業大学新聞局

京都府京都市北区上賀茂本山

遠望館1階 EB113

TEL 075(701)9198(直通)

発行人 山川 諒 大(法4)

編集人 谷岡 知 宙(法3)

<https://kyoto-su-press.jp/>

[jimdo.com/](https://jimdo.com/)

## 今号の紙面

宮森教授に訊く生成AIとの付  
「街の冷蔵庫」フレスコ株式会社ハ！

# 宮森教授に訊く 生成AIとの付き合い方

近年「ChatGPT」をはじめとする生成AIが広く普及している。技術が急速に発展する中で、教育現場ではその活用法や倫理教育が十分に追いついていないという課題も明らかになってきた。今回は「AIとの付き合い方」をテーマに、情報理工学部情報理工学科の宮森恒教授に話を聞いた。

AIは、事前に学習した範囲には強い一方で、学習時に想定されていない条件や複雑な手順に対しては、依然として頼った判断をする傾向がある。そのため宮森教授は、想定外にも対応できるAIの研究に取組んでいる。「AIがより、なせ失敗するのかを分析し、未解決の問題に直面しても、それまでに獲得した知識を組み合わせた上で、より安定した正確な推論をAIの開発者を目指す」と語る。

私たちが普段、AIとの付き合い方を考えるとき、どのような特性や限界を理解し、自身の思考を拡張するツールとして活用してはいいか。AIは、もっともしく頼った情報を出力することがあるため、出力内容を検証できるだけの確かな知識を身につけておくことは重要だという。「社会の様々な問題に関心をもち、それらに複眼的にアプローチできる幅広い知識と教養は、大学時代に修得することを推奨する」と話す。

また、AIは指示内容が曖昧だと、必ずしも意図通りの結果が得られるとは限らない。「AIを上手に活用するために重要となるのが、自身の意図を明確に説明する『言語化能力』である」と指摘する。

実際、教育現場ではAIをうまく使うことができない学生の中に、指示がひとつ、一言あるものに簡単にため、意図しない出力があることもかわらぬ。それを適切な言葉で修正し、



AIについて語る宮森教授

悪戦苦闘する様子も見受けられるという。「SNSでの短いメッセージのやり取りに慣れている近年の学生にとっては、長文の読み書きを通じて、伝えたい内容や文章構造を理解・構築する訓練を継続することが、実はAIをうまく活用する鍵となるかもしれない」と話す。

大学でのレポート課題やゼミナールでの議論は、まさにこの言語化能力を鍛える場にもなる。一見遠回りに見える地道な思考のプロセスこそが、将来AIを自在に操るための「基礎体力」となり、同世代間で大きな差となって現れる。

宮森教授は、「AIの目まぐるしい進化に合わせて、授業内容を更新し続ける必要性」にも触れ、AIに適切な指示を出す演習などを今後の授業に取り入れていきたいと語る。社会や世界を見渡せば、AIと共生していくことは避けられず、AIとの距離を保つことも、主体性を維持する「コンパニオン」の本質であるという。

こねる人材が、ますます社会から求められていくことが予想される。

最後に宮森教授は「真偽が定かでない情報があふれた社会においては、聞くべき情報の過剰な共感に陥らないこと、心地よいだけな違和感をもつこと、有用な情報とそうでない情報を断捨離」をアドバイス。自分自身の心と静かに向き合うことで、AIの適度な共生する時代における「AIとの付き合い方」の本質を学んでほしいと語った。

## 資格課程

### 未来の教師を育成す、 教職課程

本学に設置されている職課程について、共通教育推進機構教職課程教育担当の本城布美子さんに取材を行った。

教職課程とは、教員免許を取得するために必要科目を履修するプログラムであり、教育の専門知識・指導力や倫理観、実践力等が身につけられる。

本学では10学部1学環うち8学部で同課程を設けており、中学校、高等学校教諭の一種免許状の取得が可能だ。また、佛光大もしくは聖徳大学の通信教育課程を併せて履修することで、小学校教諭免許状を得る道も開かれている。同課程を履修するメニューは多岐にわたる。各教